

# 私と みたか

vol.37

# 私と太宰

上智大学外国語学部准教授  
ガジェゴ エレナさん

## 日本文学を 日西友好の架け橋に

スペイン出身のエレナさんは、言語と文学に興味を持ち、大学では文献学を学んでいた。日本文学に出会ったとき、自分の世界とこれほど異なる世界があることに驚くとともに、日本語の音声の響きの美しさ、普通のペンで書いても芸術的な「漢字」という象形文字に、すっかり魅了された。スペインから日本はとても遠かったが「雷に撃ち殺されても日本語を勉強したい」と強く思うようになっていった。

エレナさんが来日を果たした1990年代は本国のスペインのみならず、南米の日系人が多く日本に来た時期にあたる。日本国内でもスペイン語の雑誌なども多く出版された。モンセ・ワトキンスさんと知り合ったのは、そうした雑誌のインタビュー記事からだった。エレナさんは日本文学をスペインに伝えたいという強い思いを持っている。モンセさんもこうした活動を行っていた。すぐに手紙を書き、そして親しくなった。

太宰治のことも、モンセさんを通して知った。武者小路実篤、森鷗外の作品から日本文学に入ったエレナさんからすれば、太宰治は素のままに生きている人という印象だったそう。建前で行動し本音を隠す人間が多い中、太宰はまわりに合わせることなく、正直に生きている人と映った。また、自分が弱い人間であることをあえて主張しているようにも



みえた。多くの太宰ファンはこうした太宰の弱さを自分の鏡であるかのように感じながら読み、太宰に傾倒していくのだろう。時代を超えて若い世代に支持されている理由のひとつととらえている。

日本とスペインの距離はまだ少し遠いのかもかもしれない。でもいつかモンセさんのように、太宰治の作品を翻訳しようと思っている。

どんな作品を訳したいか?という問いに意外なこたえが返ってきた。『畜犬談』だそうだ。そう話しながらストーリーを思い出して笑いだしてしまった。太宰は変わった人物なのだと言う。この作品もおもしろくて苦い笑いを含んだ作品だと笑いながら話が止まらなくなる。当時の日本人で犬についてあれほどの思いを持っている人はほとんどいなかっただろうと分析する。作品は甲府が舞台であるが、三鷹村に転居する寸前の設定である。

すでにスペイン語に翻訳されている『人間失格』や『斜陽』と、『畜犬談』が同じ作者による作品だと知ったとき、スペイン人の太宰治観もさぞかし変わるだろう。

作品はほとんど日本語で読んでいるというエレナさんが架け橋となって、スペインと日本の距離がもっと近くなればよいと思った。

(取材・インタビュー 三森美知)

おすすめの作品:『畜犬談』

初出「文学者」1939(昭和14)年8月、『太宰治全集3』(ちくま文庫)に収録

# 私とみたが

vol.37

# 私と太宰

上智大学外国語学部准教授  
ガジェゴ エレナさん

## 日本文学を 日西友好の架け橋に

スペイン出身のエレナさんは、言語と文学に興味を持ち、大学では文献学を学んでいた。日本文学に出会ったとき、自分の世界とこれほど異なる世界があることに驚くとともに、日本語の音声の響きの美しさ、普通のペンで書いても芸術的な「漢字」という象形文字に、すっかり魅了された。スペインから日本はとても遠かったが「雷に撃ち殺されても日本語を勉強したい」と強く思うようになっていった。

エレナさんが来日を果たした1990年代は本国のスペインのみならず、南米の日系人が多く日本に来た時期にあたる。日本国内でもスペイン語の雑誌なども多く出版された。モンセ・ワトキンスさんと知り合ったのは、そうした雑誌のインタビュー記事からだった。エレナさんは日本文学をスペインに伝えたいという強い思いを持っている。モンセさんもこうした活動を行っていた。すぐに手紙を書き、そして親しくなった。

太宰治のことも、モンセさんを通して知った。武者小路実篤、森鷗外の作品から日本文学に入ったエレナさんからすれば、太宰治は素のままに生きている人という印象だったそう。建前で行動し本音を隠す人間が多い中、太宰はまわりに合わせることなく、正直に生きている人と映った。また、自分が弱い人間であることをあえて主張しているようにも



みえた。多くの太宰ファンはこうした太宰の弱さを自分の鏡であるかのように感じながら読み、太宰に傾倒していくのだろう。時代を超えて若い世代に支持されている理由のひとつととらえている。

日本とスペインの距離はまだ少し遠いのかもかもしれない。でもいつかモンセさんのように、太宰治の作品を翻訳しようと思っている。

どんな作品を訳したいか?という問いに意外なこたえが返ってきた。『畜犬談』だそうだ。そう話しながらストーリーを思い出して笑いだしてしまった。太宰は変わった人物なのだと言う。この作品もおもしろくて苦い笑いを含んだ作品だと笑いながら話が止まらなくなる。当時の日本人で犬についてあれほどの思いを持っている人はほとんどいなかっただろうと分析する。作品は甲府が舞台であるが、三鷹村に転居する寸前の設定である。

すでにスペイン語に翻訳されている『人間失格』や『斜陽』と、『畜犬談』が同じ作者による作品だと知ったとき、スペイン人の太宰治観もさぞかし変わるだろう。

作品はほとんど日本語で読んでいるというエレナさんが架け橋となって、スペインと日本の距離がもっと近くなればよいと思った。

(取材・インタビュー 三森美知)

おすすめの作品:『畜犬談』

初出「文学者」1939(昭和14)年8月、『太宰治全集3』(ちくま文庫)に収録